

障害のある子どもの保護者の教師に対する信頼性認知とその関連要因

本間 愛菜

I 問題

障害のある子どものより良い教育・支援のため、教師と保護者が連携・協働していくことは重要であり、教師と保護者の信頼関係がその土台となる。信頼関係に関わる保護者側の視点として、杉本・遠藤・飯田・青山・中井 (2019)は、小・中学生の子どもを持つ保護者の信頼性認知を明らかにし、「教師の役割遂行能力」、「規律的指導」、「子どもに合わせた指導」、「子どもが示す好意」という4つの因子をもつ信頼性認知尺度を作成した。また、学校対応の有無、トラブル時の学校対応に対する満足度、教師へ援助を求めることへの心配との関連を示し、保護者の教師に対する信頼性認知は教師と保護者の協働に関与していると示した。

しかし、障害のある子どもを持つ保護者の教師に対する信頼性認知についてはまだ明らかになっていない。先行研究から、保護者のニーズへの対応が信頼性認知に含まれることや、子どもの情報に関する両者間のやりとりとの関連が考えられる。教師と保護者の連携・協働促進を図るには両者の信頼性認知を明らかにする必要があるが、まずは障害のある子の保護者の視点である教師に対する信頼性認知と、関連が考えられる要因を明らかにする必要があると考える。

障害のある子の保護者の教師に対する「信頼性」に着目し、障害のある子の保護者による教師の信頼性認知とその関連要因を明らかにすることは、障害のある子を担当する教師と保護者の連携・協働促進の手がかりとなると考える。

II 目的

障害のある子の保護者の教師に対する信頼性認知とその関連要因を明らかにし、特別支援教育における教師と保護者の連携・協働促進の手がかりを得ることを目的とする。なお、本研究が本学の倫理規定に抵触しないことを確認した。

III 研究1

1 目的

障害のある子どもの保護者の教師に対する信頼性認知とその関連要因について明らかにする。

2 方法

縁故法により研究協力の承諾を得た、障害のある子ども(在学者及び既卒者)の保護者26名に、郵送による質問紙調査を行い、回答が得られた22名の結果を集計した。

調査項目は予備調査で確定した、1)子どもの障害種や各種手帳の有無、2)杉本ら(2019)を参考とした障害のある子どもを持つ保護者の教師に対する信頼性認知、3)回答者自身の学校対応の有無、4)トラブル時の学校対応に対する満足度、5)教師へ援助を求めることへの心配、6)やりとりの実態とした。

3 結果と考察

障害のある子の保護者の教師に対する信頼性認知について、表1より本研究で調査を行った障害のある子の保護者の教師に対する信頼性認知尺度の合計の平均値は4.14であり、杉本ら(2019)の小・中の保護者の信頼性認知尺度の合計の平均値より高かった。杉本ら(2019)の研究では、小・中学生の子を持つ保護者の教師に対する信頼性認知尺度の合計の平均値は、小学生の子を持つ保護者の方が中学生の保護者より高いという結果となった。この小・中の信頼性認知尺度得点の差について、杉本ら(2019)は、小学校教師は「支援する」、中学校教師は「訓練する」意識が高いという、指導意識に基づく教師の行動が尺度内容と関わっている可能性があるためだと推察している。このことから、特別支援教育に携わる教師は「支援する」意識を高く持っており、その指導意識に基づいた行動をしていることで、尺度の得点の平均値が高くなった可能性があることが考えられた。また、尺度内容の調査対象として既卒の子を持つ保

表1 障害のある子どもの保護者の教師に対する信頼性認知尺度の下位尺度と合計の記述統計

(n=22)				
項目	最大値	最小値	M	SD
I 教師の役割遂行能力	5	2	4.31	.79
II 規律的指導	5	2	4.02	1.02
III 子どもに合わせた指導	5	1	4.21	.90
IV 子どもが示す好意	5	1	3.61	1.05
V 保護者のニーズへの対応	5	2	4.23	.84
合計	5	1	4.14	.92

表2 障害のある子どもの保護者の教師に対する信頼性認知尺度の下位尺度 5 つの回答比率

項目	否定群(%)	肯定群(%)
I 教師の役割遂行能力	4.3	95.7
II 規律的指導	11.1	88.9
III 子どもに合わせた指導	6.8	93.2
IV 子どもが示す好意	12.8	87.2
V 保護者のニーズへの対応	5.2	94.8

護者も対象となっていることも要因の1つではないかと考えられた。

尺度の各因子について表1より、5つの下位因子の中で、「IV子どもが示す好意」の平均値が3.61とその他の4つの平均値と比べて低かった。杉本ら（2019）が調査した小・中学生の子の保護者においても、下位因子の中で「IV子どもが示す好意」の平均値が最も低かった。杉本ら（2019）は、「IV子どもが示す好意」について、子どもからの情報の有無が関わっていると推察している。本研究で対象とした保護者の子どもは、療育手帳や身体障害者手帳を有しており、8割以上知的障害のある子どもであった。また、障害が重複している子どもは22人中10人であった。これらの結果から、今回は保護者に言葉で伝えることが困難である子どもが対象に含まれ、「IV子どもが示す好意」の得点結果に反映された可能性があることが考えられた。平均値が最も高かった下位因子について、小・中学生の保護者の場合は「II規律的指導」、今回得た障害のある子の保護者の場合は「I教師の役割遂行能力」であった。以上のことから、障害のある子の保護者の信頼性認知について、小・中学生の子を持つ保護者のものと共通する部分と異なる部分があることが推察された。障害のある子の保護者の信頼性認知について、子どもの障害種や程度によって因子の背景要因が変わることも考えら

れ、障害のある子の保護者の信頼性認知について、障害種や程度による信頼性認知の構造の違いを明らかにする必要があると考えられた。

本研究で調査した障害のある子の保護者の信頼性認知尺度の得点結果について、表2より5つの下位因子ではどれも肯定的な意見の割合が8割を超える結果となった。そのため、本研究で調査を行った障害のある子の保護者の教師に対する信頼性認知は肯定的なものであることがうかがえた。

「I教師の役割遂行能力」の各項目について、「子どものために一生懸命である（であった）」は否定的な意見がみられなかった。本研究で調査を行った障害のある子の保護者の教師に対する信頼性認知が肯定的であると考えられることから、子どものために一所懸命であるということが、保護者が信頼できると感じる教師の一要素であると考えられた。

「II規律的指導」の各項目について、「必要なときには、しっかりと叱ってくれる（くれた）」の否定的な意見が1割を占めており、他の項目の否定的な意見の割合より高かった。本研究で調査を行った障害のある子の保護者の教師に対する信頼性認知が全体的に肯定的であると考えられることから、障害のある子の保護者にとって子どもを叱ることは、信頼できると感じる教師の一要素として捉えられづらいことが推察された。

「III子どもに合わせた指導」の各項目について、「子どもに寄り添って考えてくれる（くれた）」の肯定的な意見が9割を占めた。教師が子どもに寄り添って考えていることは障害のある子どもの保護者が教師を信頼できると感じる一要素であることが考えられた。

今回の調査で新たに加えた「V保護者のニーズへの対応」では、「保護者（自分）の意見・思いを聴いてくれる（くれた）」の項目について肯定的な意見が9割であり、他の2つの項目の肯定的な意見の割合より多かった。「個別的教育支援計画」の作成や、教育課程の編成及び実施において、家庭からの要望を相互の意思疎通を図って生かしてい

くこと（文部科学省，2018）と示されていることをふまえ，特別支援教育において保護者の意見・思いを聴くことを行っている教師が多いことが推察された。

次に関連要因についてである。回答者自身の学校対応の有無とトラブル時の学校対応満足度について，信頼性認知との有意な差や相関は示されなかった。しかし，クロス集計にて整理したところ，トラブルがある場合でも学校対応に対する満足度と信頼性認知の得点には関連性があることがうかがえた。トラブルが起きた場合でも保護者が納得できる学校対応をすることが，保護者教師間の信頼関係を保っていくことにつながると考えられた。

信頼性認知と教師へ援助を求めることへの心配との関連について，これら2つの項目それぞれに，信頼性認知との相関があることが明らかになった。先行研究と同様に，相談行為という連携・協働につながる行為に信頼性認知が関連することが示唆された。このことから，特別支援教育において教師と保護者の連携・協働促進のために，障害のある子の保護者の教師に対する信頼性認知について詳しく分析していく必要があると考えられた。

障害のある子の保護者の信頼性認知と情報のやりとりと信頼性認知との関連について，まず，やりとりの種類について，「連絡帳」「面談」でのやりとりを行っている人が多く，「送迎時」でもやりとりをしていることが明らかになった。しかし，やりとりの種類との関連は推察されなかった。次にやりとりの頻度と信頼性認知との関連についてである。やりとりの種類（連絡帳，面談，電話，メール，送迎時）ごとにクロス集計にて整理したところ，連絡帳，面談，送迎時のやりとりの頻度と信頼性認知との関連性がうかがえた。特別支援学校では保護者が送迎をし，教師と対面する機会がある場合がある。短い時間でも対面してやりとりを行うことと保護者の教師に対する信頼性認知の関連性があることが考えられた。次にやりとりの内容と信頼性認知との関連について，「教師の振

り返り・反省」と信頼性認知との関連性がうかがえた。上村・石隈（2007）は，「教師の振り返り・反省」は保護者との信頼関係を構築する役割を担っていると指摘している。このことから，教師の振り返り・反省を行うことと障害のある子の保護者の信頼性認知に関連性があると推察された。

IV 研究2

1 目的

「信頼できる」また，「信頼できない」教師に関して，その特徴や具体的な出来事を事例的に明らかにする。

2 方法

障害のある子どもを持つ保護者2名に半構造化面接を行った。質問項目は，1) 教師を信頼できると感じた具体的な出来事，2) 教師を信頼できないと感じた具体的な出来事である。エピソードの内容のコーディングを行い整理し，カテゴリーごとの件数と比率を算出した。

3 結果と考察

信頼できる／できないと感じた教師について，「子どもの姿の変化」「やりとり」「他機関とのつながり」「教師同士の人間関係」「指導・支援のつながり」という多くの具体的なエピソードが挙げられ，多様な語りを得ることができた。保護者の語りの種類の多さと語りの内容が具体的であることから，子どもが卒業した後でも具体的な記憶が残っていることがうかがえ，保護者は学校での子どもの様子や成長を見取り，感じている存在であることがわかった。

信頼できないと感じた教師について，教師同士の人間関係の悪さに関するエピソードが挙げられた。特別支援教育においては複数の教員で対応するティーム・ティーチングによる指導が主流である。そのため，教師同士の人間関係が指導・支援に影響すると保護者に認識されていることが推察された。

教育に対する期待について，できることを伸ばすことや障害の特性を踏まえて生活に合った力を

表3 信頼できると感じた教師に関するエピソードの
カテゴリーの件数と比率

カテゴリー	件数	%
教師側の子どもに関する情報提供	8	36.4
子どもを見る目線	4	18.2
教師の特別支援教育に対する意欲	4	18.2
子どもを見取る力	2	9.1
保護者の話を聴くこと	2	9.1
子どもに対する適切な指示	2	9.1
合計	22	100.0

伸ばしてくれること、卒業後や将来を見据えた視点で指導・支援を考えることを教師に求めていると明らかになった。これは障害のある保護者のニーズの1事例として捉えることができ、両者間の連携・協働促進の手がかりになると考えられた。

V 総合考察

信頼性認知尺度の「I 教師の役割遂行能力」の「子どものために一生懸命である（であった）」の項目について、否定的な意見がみられなかった。研究2において「教師の特別支援教育に対する意欲」が18.2%であり（表3）、教師の子どものために指導・支援を考えたり自分自身を成長させたりしようとする一生懸命さを保護者が認識することが、保護者が教師に対する信頼を高めることが推察された。

「Ⅲ子どもに合わせた指導」の「子どもに寄り添って考えてくれる（くれた）」について、肯定的な意見が9割を占め、研究2では信頼できた教師について、障害の特性を踏まえて子どもの生活に合った力を伸ばしてくれたという事例が挙げられた。永井・武田（2018）も、実質的な配慮に加えて本人の気持ちも考慮した学習活動の展開が保護者の満足感をより高める可能性がある」と指摘していることから、教師が子どもに寄り添って指導・支援を考えていると保護者が認識することが、保護者の信頼を高める1要素であると推察された。

「V保護者のニーズへの対応」では、「保護者（自分）の意見・思いを聴いてくれる（くれた）」の項目について肯定的な意見が9割であり、研究2において、信頼できると感じた教師に関する語り

の中で「保護者の話を聴くこと」というカテゴリーが2件であった。このことから、保護者の教師に対する信頼を高める要素の1つとして保護者の意見や思いを傾聴することがあると考えられた。

障害のある子どもの保護者と教師の連携・協働促進に関連する要因として、情報のやりとりがある。本研究1より、連絡帳でのやりとりの頻度と信頼性認知の関連性や面談の頻度と信頼性認知との関連性がうかがえたことから、教師とやりとりをする頻度は、保護者の教師に対する信頼に関わる要素であることが推察された。また、やりとりの内容についても「教師の振り返り・反省」や「教師側の子どもに関する情報提供」が信頼に保護者の教師に対する信頼を高めることに関係している可能性が考えられた。これらのことから、やりとりについては頻度だけでなく内容も重要になると推察され、ただやりとりを行うのではなく、その内容を考えて行っていくことが、保護者と教師が信頼関係を築きながら連携・協働していくための方法の1つだと考えられた。

また、障害のある子の保護者の教師に対する信頼性認知が相談行為という連携・協働につながる行為に関係することが明らかになった。「保護者（自分）の意見・思いを聴いてくれる（くれた）」の項目について肯定的な意見が多く、研究2でも「保護者の話を聴くこと」というカテゴリーが2件みられた。これらのことから、教師が保護者の意見・思いを傾聴することや相談行為や教師に対する心配を減らすための働きかけをすることが、保護者と教師が信頼関係を築きながら連携・協働していくための方法の1つだと考えられた。

文献

- 上村恵津子・石隈利紀（2007）保護者面談における教師の連携構築プロセスに関する研究—グラウンデッド・セオリー・アプローチによる教師の発話分析を通して—。教育心理学研究, 55, 560-572.
- 文部科学省（2018）特別支援学校学習指導要領総則編
- 永井拓也・武田鉄郎（2018）ムコ多糖症のある幼児児童生徒の保護者が認識した教育的支援と満足の評価。特殊教
- 杉本希映・遠藤寛子・飯田順子・青山郁子・中井大介（2019）保護者による教師の信頼性認知尺度の開発とその関連要因の検討。教育心理学研究, 67, 149-161.